

対人支援点描 (11)

「忖度と共感」

小林 茂 (臨床心理士/牧師)

1. 「忖度」について

世間で森友学園の話題がなるにつれて「忖度」という言葉が浸透するようになりました。この一件がなければ、私も「忖度」という言葉を知りませんでした。そもそも「忖度」という事柄は、「相手のことを思い図ること」という意味だそうです。このこと自体は問題ではありません。思いやりや共感に関係する良い言葉のように思えます。しかし、かの一件により「忖度」という言葉はずいぶんと悪いイメージとして定着してしまった印象があります。宜しくない配慮や気づかいというイメージです。

2. 「小林、購入した体重計に忖度受ける事件」発生！

こうした意味で「忖度」という言葉をとらえると、私にも一つの事件がありました。健康管理の目的で、この6月に体重計を購入しました。一応、大手のメーカーのデジタル体重計です。体重だけではなく、体組織、BMI その他が計測できるタイプで

す。届いて早速、基本設定し、おそろおそろ体重計に乗りました。結果は、 00.0kg ...。私の気持ちは内心「あ～、ずいぶんあるな。体重を落とさなきゃな。でも大変だ。」というものでした。その後、節制と多忙で1週間ほど体重計に上がることがなかったのですが、測りなおしてみると、何と 3kg ほど減っていました。こうなると気分は上々で頑張ろうという気持ちになり、体重計に乗るのが楽しくなります。ところが、翌々日、もう一度図りなおしてみると、さらに 3kg ほど体重が減っているのです。このあたりで私も気づけばよいのですが、困惑とともに良い方に事実を誤認する回路が働いて、買ったばかりの体重計で、デジタルで正確なはずだという意識も働いて、その数値を鵜呑みにすることにしました。内心も、疑うよりもどこか嬉しい気持ちが勝っているのです。自分なりに「いや～。このところ夏場でたくさん汗かきながら、外仕事もしたし、食事も気をつけてきたのが実を結んだのかな～？サプリメントの影響もあったのかな？」と考えたわけです。

しかし、そこからが問題でした。翌日より毎朝、体重計に乗るたびに約 3kg ずつ

数値が減っていったのです！さすがに 3 日間で 10 kg 以上体重計の数値が減り続け、さらにその減少が止まることのないとなると、さすがに鏡を見る自分の姿と体重計が示す数値とのギャップに気づかないわけにはいかなくなります。いつか体重計が目を覚ますと信じて乗り続けましたが、しまいには、ついに体重計の数値が 35 kg ほどまで減ってしまい、体組織も測定不能になる状態になりました。

「体重を減らさなければ」という決意する私に、購入したばかりの体重計が忖度して、体重計の数値だけが持ち主をほおっておいて勝手にダイエットに励み、ついには摂食障害レベルまで忖度を利かしてしまったのでした。

そうです。体重計の初期不良でした！

この間の私の驚きと喜びと落胆....

話のスケールは比べようがありませんが、私も 9 億 5600 万円の土地が 1 億 3400 万円に値引きされるような落差を味わいました。

人ではなく、予想もしなかったデジタル体重計に「忖度」を受けたのでした。

3. 「忖度」と「共感」とのあいだ

デジタル体重計に「忖度」されたのは偶然のことでしたが、本来の「忖度」とは、そもそも相手の気持ちを推し量るとか、察するというような能力がなければできないことといえる。「忖度」は、機械のように予め蓄積されたデータを積み増し、データから導き出される選択肢の中から適切な答えを導き出すわけではない。不確実で予測外の要素を多分に含んだ他者の情動を読み取ろうとする「共感」的な人間の営

みということができる。これが機械との大きな違いといえる。

先日、法人の会計士さんが AI と将棋や囲碁との対戦について熱弁していったのだが、あるフレームのなかでは、もう AI に人間は勝てないという話をしていた。AI が、いわゆる定石を無視した手を打つのだが、プロの棋士でさえも AI がなぜそのように打つかわからない。棋譜を見せられても説明もできないということだった。それでも、最終的には AI が勝利してしまうというのだ。さらに面白いことに、AI は守りの手の一つの穴熊をしないという。これは、AI では人間が良いと思う最良の手立てを最良と判断しない、ということの意味している。

こうしたことを考えると、「忖度」の元となる「共感」という行為には、共感する方も共感される方にも最良の論理的・合理的帰結に基づいて、相手の気持ちを察するとか、察せられたということがない。対人援助を行う側の気持ちとして、人間が如何に最良の選択に基づかない言動をしているか、感じずにはいられない。「そんなに意固地にならなくても...」「どうして、そんな選択をするの?」「また同じ過ちを繰り返して...」という気持ちになる。同時に、援助者が共感したと感じていても、相手の方では「この人(支援者)は、わかってくれない(もしくは、わかってくれていない)」「この人は日本語が通じない。」と内心思っているかもしれない。こうして考えてみると、「共感」とは論理的・合理的な判断とは程遠く、情緒的納得というものに近い。単純な“トランプ”よりも心の内は読めない。よくある「共感」のロールプレイによるワークでさえ、実際には「共感できた。できていない。」の確認作業において

「付度」がなされている場合が多いのではないか。結果として、「共感」の前後に「良い付度・良くない付度」「的を得た付度・的を得ない付度」といったものが生じているといえる。もしくは、「付度」の前後に「良い共感・良くない共感」「的を得た共感・的を得ない共感」というものが生じているといえる。

4. まとめ～人間の営みのあいまいさ

AI が進化するとなくなる職業の一つにカウンセラーが挙げられているという話を聞いたことがある。私自身も、その可能性は否定するつもりはない。しかし、実際にカウンセラーの役割のすべてが必要とされなくなるとは思わない。たとえ、AI があるクライアントの語った言葉に最適な返事を選択し、“応えた”としても、果たしてその“答え”は共感を生じさせるものだろうか。正当な答えが答えにならない不合理さを人間は持ち合わせていないだろうか。AI が論理的・合理的選択を優先する限り、そこにはズレが生じるであろうし、無言やズレをそのまま良しとして先延ばしすることの意味に AI は対応できるであろうか。

「付度」にしても「共感」にしても、いずれにしてもあいまいさを多分に含んだ人間の営みである。哲学の純粹理性のような意味での純粹付度とか純粹共感という世界はない。雑多で混沌とした心の内を察して納得するというものと思う。

それゆえ、誤認や思わぬ方向に話が進んでしまうという性質を「付度」や「共感」は持っているといえる。